『「テロとの戦争」とは何か ——9・11以後の世界』以文社

西谷修

二〇〇一年九月一一日以後、その出来事をめぐる言説は、すでにひとつの「ジャンル」を形成するまでになった。書店には、トピックと言って済ますにはあまりに数多い「9・11モノ」が溢れだしている。事件の「原因」「事情」「力学」を論じ、「被害者」や「テロリスト」として表象されるひとびとのさまざまな虚実を塗り上げ、死者たちの死の意味を加工する。この「ジャンル」の比較的顕著な特徴は、《出来事以後、世界はある根本的に新奇な事態に突入したのではないか》と説明する点にある。

本書は、その中心に『世界』二〇〇一年一一月号に掲載された「これは『戦争』ではない——世界新秩序とその果実」を据えて編まれた西谷修の時事論集である。この『世界』論文が実に大きな影響を与えたことは、それが直後に岩波新書『テロ後、世界はどう変わったか』(岩波書店、二〇〇二年)の巻頭論文として再録されたことからも伺えよう。「これは『戦争』ではない」! 事件後の混迷のなかで、なんとも印象鮮やかなテーゼであった。わたしは、事件直後の月刊誌群にはみごとな三幅対が現れたと、『歴史学研究』の二〇〇二年一〇月号に寄せたある論考で分析したことがある(1)。最初に『文藝春秋』二〇〇一年一〇月緊急増刊号が「これは戦争だ」と断言し、「日米総力特集」を企図した。これに対して『世界』二〇〇一年一一月号が、西谷の「これは『戦争』ではない」をアンチテーゼとして掲げたのであった。そして、青土社の『現代思想』二〇〇二年一〇月臨時増刊号は、「戦争なのか」、「戦争ではないのか」という左右の対立とも見える論戦の底そのものを抜いてしまうような反ジンテーゼとして、『総特集=これが戦争か』を提示したのだった。日本における雑誌メディアの言説配置をこれほど分かりやすく示した実例も珍しい。もっとも西谷の役割は、『世界』におけるアンチテーゼの提出者にはとどまらなかった。面白いことにかれは、『現代思想』の臨時増刊号の方でも、やはり本書に収められた「ヴァーチャル植民地としての世界」を書いており、実践的には「否」と断言しつつ、同時に事件がかいま見せる問題の深みに大胆に思考を放ってみせたのである。こうして本書には、事件ののちの数ヶ月間に日本語で書かれた「9・11モノ」のなかの、まぎれもなくもっとも力のあるテキストが鏤められている。かつての共産同戦旗・日向派の理論誌であった『理戦』の二〇〇一年冬号に載った談話「アメリカの崩壊が始まった」から、二〇〇二年の『新潮』(新潮社)に連載された短い映画評などまで、初出の舞台も多様である。

西谷の姿勢を見るときに大切なのは、かれにおける「方法としての反米」というべき言説戦略である。もちろん、同時期に出た小林よしのりと西部邁による『反米という作法』

（小学館、二〇〇二年）あたりのメンタリティと混同されてはならない。いまや「反米気分」は、日本の社会を覆う空気ともなっている。しかし、そうした反米気分は、アメリカを中心とする戦時秩序がみるみる形成されていくことを阻止する力になるどころか、ナショナルなナルシシズムを増幅することで現状追認的になり、批判的な営みの潜勢力を萎えさせることにしかつながっていない。西谷の「方法としての反米」は、そうしたナルシシズムや諦念とはもっとも遠いところにある。国際政治学者の藤原帰一が『朝日新聞』の「論壇時評」で、西谷の論考を自分の編著にちゃっかり編んでおきながら、西谷の言論を「怒号にすぎない」と揶揄したことがあった。そのとき藤原が間違っていたのは、「すぎない」と付け足したことである。西谷のそれはまぎれもなく「怒号」なのである。計算づくの「怒号」が、したり顔のメディア解説者たちの言説をはねつけ、グローバリゼーションの暴力が帯びる自然性に屈することをあらかじめ拒む思弁の戦略として選ばれている。藤原のつねに中途半端な高みからの貧血性の時評にはそれが分からない。

アメリカは「世界新秩序」のなかで唯一の「主権者」として振る舞っている。それは「例外状態について決定できる者」であり、法秩序を停止させ、敵と友との硬直した境界を指定する。冷戦の崩壊以後、すでにアメリカ政府は何度もそうした問答無用の攻撃を仕掛けてきた。いわゆる「テロ」もまた、湾岸戦争以来のこのアメリカのやり方によって誘い出されたものであって、けっして事態が「テロ」からはじまったのではない。世界でおそらくはもっとも貧しい地域のひとつであるアフガニスタンを、その貧困に積年の責任がある肥満したアメリカが、もっとも高価な兵器によってあらためて蹂躙し、しかもそれを「報復」と称することのグロテスク。また、知識人が、かくも深く世俗権力に丸め込まれ、専門的知識を提供する権力の助言者以外の機能をいっさい果たさなくなってしまった事態。そうしたグロテスクや頽落を地にしながら、「怒号」を忘れまいとする意志は本書のなかでまことに鮮烈な図として浮かび上がっている。

（岩崎稔）

(1) 岩崎稔、「出来事と歴史家と戦争」『歴史学研究』「特集＝『対テロ戦争』と歴史認識」歴史学研究会編、二〇〇一年一〇月号、七六九号、四六頁以下。